



## 女性医師の窓

### 犀川に架かる車窓から ～幼少時の思い出～

西日本旅客鉄道(株) 金沢健康増進センター 西澤 依小

十数年間内科の臨床医をやっておりましたが、現在は鉄道会社の専属産業医として働いています。臨床医の頃には、仕事に必要なのはそれなりの専門知識と勘、人情みtainなものかなと感じていましたが、こちらで求められているのは産業衛生に関する若干の知識と「現場の空気を読む力」でしょうか。よく“医師の常識世間の非常識”と言われますが、病院の組織と民間企業では、基本体質も医師に求められるものも大きく異なります。さらに鉄道業は分離分散職場が多く、仕事も多様であるため、誰がどこでどんな仕事をしているのか、さらに電車とそれを動かす様々な設備についても覚えることは案外大変でした。当初はかなり戸惑いもありましたが、ぼちぼち自分のスタイルをつくらうとしているところです。それに、現在この企業で私が担当している職場のエリアは糸魚川から敦賀まで、さらに本社は大阪にありますので、電車移動もしばしば。これも仕事の一環ですから、案外楽しいものです。

そんな移動の電車に乗り、大豆田のあたりで犀川にかかる鉄橋(犀川橋梁)を渡るとき、私は既に他界した父のことを思い出します。父は古い人でしたから、(電車に乗る予定がなくとも)外出する時には「キシヤジャン(汽車時間)！」といって家族を急かし、時には「テイシャバ(停車場/金沢駅)」に散歩がてら足を運び、新聞数紙を買い求めていました。

その父は、ある時期何度か、幼い私を連れて犀川の土手に連れて行ってくれました。今から思えば弟が生まれる頃で、母の代わりに私の面倒を見てくれたのだと思います。父のサンダルの上に腰を下ろして、近くで買ってくれたのでしょうか、冷たいアイスクャンディーを食べながら犀川橋梁を見上げ、「ああ、左から汽車が来た、もうすぐ金沢駅に着くんやぞ。次は右から来るかもしれんね。もう1本見てから帰ろうか・・・」、なんて話をしていました(因みに、当時私が眺めていたのは既にキシヤからデンシャに変わっていたはずですが)。土手の草むらにさえ陽炎がたちそうな暑い時期でした。

その私は今や、かつて見上げていたその鉄橋の上を電車に乗って西へ東へと移動しています。しばらく前までは、金沢駅上り線を発車後にやがて左手に広がる、昔2人が腰を下ろしていた土手を“上から”眺めては、臉上当時“下から”見上げた鉄橋の風景をガタンゴトンというBGMとともに甦らせ、ノスタルジーに浸ることもありました。

しかし、現在は在来線に並んだ犀川上流方に新幹線の線路が架かり、在来線から犀川上流の土手は全く見えなくなってしまいました。大切にしていた思い出の風景が遮蔽され、はっと気付きます。時代は流れているんだ、と。2年後にやってくる北陸新幹線開業に向けて、自治体も企業も、着々と準備を重ね、街も鉄道も変わってきています。

変わりゆく風景を眺めながら、いま自分に求められている社会的役割りは何か、自分がどのように変化していくべきなのか、そして、自分の子供達が大人になった時、ふと懐かしく甦るような風景を心に残してやれるだろうか、と考えます。

・・・そんなわけで、子供達が少しでも多く自分の目で見えた風景を心に刻む事が出来るよう、母親と出かけるのを嫌がらないであろう残り少ない時期に、子供と自分の時間が空けばあちこちに出かけようと努めている今日この頃です。